

神々の住まいの内装

—石清水八幡宮の室礼（しつらい）について

都城発掘調査部 平城地区遺構研究室 山崎有生

1. はじめに

奈良市にも比較的近い京都府八幡市には、石清水八幡宮という神社がある。『徒然草』第52段、「仁和寺にある法師」でよく知られる神社である。今日は、仁和寺の法師がついに見ることのできなかった、山上の壮麗な社殿を取り上げたい。そして、内部にある家具類（歴史用語では調度という）とその配置（歴史用語では室礼という）に着目し、この特徴的な社殿の発生に関わる1つの見解をしめしたい。

石清水八幡宮本殿

石清水八幡宮は9世紀に宇佐神宮（大分県宇佐市）から分社された神社。貞觀2年（860）に本殿が創建された。祭神は誉田別尊（応神天皇）・比咩大神・息長姫命（神功皇后）。その本殿は寛永11年（1634）再建である。その外観は間口（桁行）11間の巨大な社殿にみえるが、実は間口（桁行）3間×奥行（梁行）2間の6つの建物に分割できる。すなわち、桁行3間×梁行2間の建物を前後にならべ（前方の建物を外殿、後方の建物を内殿と呼ぶ）、その間を樋下でつなぐ。そして、この2棟を1セットとし、横方向に3セットならべて相互を造合で連結しているのである（図1）。中央は中御前（誉田別尊）、西は西御前（比咩大神）、東は東御前（息長姫命）と呼ばれる。床の高さは、内殿・外殿とも同じだが、樋下と造合はそれよりも低い床を張る（図2）。ただし、樋下は建久6年（1195）年より前は上間であったことが文献資料から判明している。樋下の両端には扉を開き、外殿の正面には蔀を吊る。内殿は板壁と扉により、樋下とは完全に隔てられているが、外殿と樋下・造合の間には低い壁がもうけられるのみで比較的開放的である。本殿の内部へは正面からではなく、樋下両端の扉から入る。

特殊な形態の神殿「八幡造」

神社本殿の形式には伊勢神宮を代表とする神明造、春日大社を代表とする春日造、京都の上賀茂・下賀茂神社を代表とする流造があり、石清水八幡宮の形式は八幡造とよばれ、宇佐神宮本殿がその代表例である。八幡造の特徴は、前後に屋根を葺き下ろす切妻造とよぶ形式の社殿2棟を前後にならべ、樋下という空間を介して連結する点である（図1・2）。現存する八幡造の本殿は古い順に石清水八幡宮本殿（京都府八幡市。1634年建立）・伊佐爾波神社本殿（愛媛県松山市。1667年建立）・柞原八幡宮本殿（大分県大分市。1751年建立）・宇佐神宮本殿（大分県宇佐市。1859-1861年建立）の4神社のみで、その建築の形式は少しずつ異なる。神社の本殿といえば一般的には人間が入ることはないが、八幡造の本殿では樋下や外殿の空間に入ることがあるのも特徴である。なお、伊佐爾波神社と柞原八幡宮の本殿の形式は中世以前に遡る確証はないことから、議論の対象となるのは石清水八幡宮と宇佐神宮である。

「御帳」と「倚子」

石清水八幡宮や宇佐神宮の現在の本殿には、内殿に御帳が、外殿に倚子が置かれている。御帳とは、貴族住宅などの寝台である御帳台の周囲に懸ける帳で、倚子とは椅子のことである。これらの調度は『石清水八幡宮記録』という史料によると、延久3年（1071）に遡ることが判明する。また、宇佐神宮

の造営関係の史料においても、応永 27 年（1420）の宇佐神宮本殿の造替（社殿の造りかえ）の時点で、内殿に御帳、外殿に倚子の存在が確認でき、この配置は先行研究により八幡造に特徴的なものとされている（詳細は 2 章で後述）。

2. 八幡造本殿をめぐる研究

八幡造が他の神社本殿の形式と比べて特徴的なのは、改めて述べるまでもなく、内殿と外殿という 2 棟の建物を前後に連結させている点である。では、八幡造で外殿と内殿が必要である理由はどのように考えられてきたのか。両者はどのように使い分けられ、どのような違いがあるとされてきたのか。先行研究から外殿と内殿の性格の違いに関する説をみてみたい。

外殿と内殿の性格の違い

外殿を礼殿（礼拝の施設）とみなす説と、内殿と対になる神殿とみなす説がある。

・井上充夫説：内殿は神殿で、外殿は礼殿などよばれる礼拝のための建物。仏教建築に双堂^{ならびどう}という、後方に仏を祀る正堂^{しょうどう}を、前方に礼拝のための礼堂^{らいどう}を並べたものがある。そこからの連想。

・稻垣栄三説：外殿は俗人の礼拝の施設ではなく、神座である。現在の宇佐・石清水の内殿には御帳、外殿には倚子が確認できる。天皇の御在所である清涼殿の昼御座^{せいかりやうでん　ひのおまし}には倚子が置かれ、貴族住宅の寝所は御帳台^{みちょうだい}とよばれる帳を垂らした寝台であることからの連想で、倚子のある外殿は昼間の御座所で、御帳のある内殿は寝所と解釈できる。また、倚子が昼の空間、御帳が夜の空間に関わるという理解は土田・太田・林に受け継がれる。

・土田充義説：長元 3 年（1030）の時点で内殿を「御夜殿」と呼んでいる。応永 27 年（1420）の時点では、内殿に御床（御帳台）、外殿には倚子が確認できる。よって内殿・外殿の両方に神座があり、前者は夜、後者は昼に関係する。

・太田静六説：内殿・外殿はともに神座をもつ神殿。内殿に御靈代^{みたましろ}（神体）が奉安され、外殿には御倚子が据えられていることから、内殿と外殿の関係は清涼殿における夜御殿と昼御座に対応する。ただし、外殿には御靈代が安置されず、その床はかなり低いものであったとみられることから、外殿は内殿に比べて格式が相当低かったと推測する。

・林一馬説：内殿に御帳、外殿に倚子を置いていずれも神座にするのは、宮殿や貴族住宅との関連をうかがわせる。特に内殿はその閉鎖性から寝殿造の寝所である塗籠^{ぬりごめ}に比定できる。また、外殿は、巫女が神懸りをし、託宣を受けるような、祭祀者が神祭りを行う場に由来する建築で、内殿は神の常住を可能にする建築と考えられる。

既往研究まとめ

以上を概観すると、稻垣・土田・太田・林は内殿・外殿とともに神殿とみなしており、内殿の神座は御帳に囲まれた、御帳台（貴族住宅の寝台）の形式で、外殿の神座は倚子の形式とみている。そして、神座の形式の違いを根拠に、内殿・外殿の性格を判断しており、彼らの見解はほぼ一致している。すなわち、内殿を夜の空間として寝所と理解し、外殿を昼の空間として昼御座とみなしている。ただし、細部の見解には相違がある。注意しておきたいのは御帳・倚子がそれぞれ内殿、外殿に置かれたとするものの、具体的にどのように置かれたのかについては言及がないことである。また、土田は、内殿・外殿の

両方に神体が安置されることや、内殿は神の夜の空間であり、外殿は昼の空間であるという、2棟の建物の性格が対になっていることを重視する。よって土田は、八幡造において両社殿が必須の要素とみて、八幡造が成立した当初から内外殿の両方で1つの神殿であったと考えている。

3. 石清水八幡宮本殿の調度・室礼の検討

ここでは、石清水八幡宮本殿の室礼を検討して、外殿の性格についての現状での見通しを述べ、八幡造成立の要因を考える手掛かりを提示したい。

石清水八幡宮本殿の室礼

中世の石清水八幡宮本殿の室礼に関しては、建保7年（1219）の年紀をもつ『諸縁起』所収の指図（図3）、その指図と類似した描写の指図を含む『石清水八幡宮御指図』（図4）、文明7年～長享2年（1475-1488）の年紀のある『八幡宮寺内外殿之間事』（図5）などの絵画資料がある。『諸縁起』は石清水八幡宮や関係する諸寺社の縁起を集録したもので、その末尾にこの指図が掲載されている。『石清水八幡宮御指図』は石清水八幡宮の主要な社殿・仏堂の指図を集成したもので、鎌倉時代のものと製作年代不明のものが混じる。ここに掲載した指図は製作年代不明のものであるが、その描写は『諸縁起』所収の指図と酷似する。『八幡宮寺内外殿之間事』は室町時代の田中奏清（1465出家-1496）という人物が、古文書や同時代の人物の口伝から、本殿内部の情報を集めて編纂した資料である。まず、調度や室礼を詳細に描写している『八幡宮寺内外殿之間事』から本殿内部の様子をみてみよう。この史料から読み取れることを描き起こすと、図6に示すような室礼となる。内殿には「御床」（脚付きの台座）、「御座」（畳）、「御筵」（奠座のようなもの）、「御茵」（座布団のようなもの）などの神体を奉安する台座や、それを覆い隠す「御几帳」（カーテン状の布帛。御帳に相当）、「御屏風」などが配される（図7）。御床・御座・御筵・御茵を下からこの順番に並べ、その上に神体を安置し、その周囲を屏風や几帳（御帳）で覆う。これらは内殿に配置される一方、外殿には御几帳が配されている。

次に、『諸縁起』所収の指図や、『石清水八幡宮御指図』（図3・4）の室礼を検討したい。これらの外殿の中央には、屏風や畳・茵のようなもの、几帳のような垂れ幕が大きく描かれる。ここで内殿や外殿の調度について記した、建武5年（1338）の『神宝御道具惣目録』と対応させてこれらの調度が何であるが明確にしたい。『神宝御道具惣目録』には「外殿御座具足」すなわち外殿の神座として「縫繻」（縫繻縁というカラフルなへりを用いた最高級の畳）・「龍鬚御筵」・「御茵」・「御屏風」・「大御帳」（几帳に相当）との記述がみられる。このうち「縫繻」は『八幡宮寺内外殿之間事』の「御座」に、「龍鬚御筵」は「御筵」に相当し、「御筵」もあることから、外殿は『八幡宮寺内外殿之間事』にみる内殿の神体を奉安する台座の構成から「御床」を除いたものであることがわかる。この構成を前提に、『諸縁起』所載の指図の描写を解釈すると、中央の小さな方形のものは「御茵」、その下にあるカラフルなへりを持つ方形のものは「縫繻」（畳）、前面に透かして描かれるものは「大御帳」（几帳）と判断できる（図9）。しかし倚子はこれら外殿の神座とは別に、外殿の隅に露出して描かれる（図9）。

以上から中世において、その構成は多少異なるものの外殿・内殿には神座が確認でき、祭神の神体を奉安することが主な目的の空間であったことがわかる。

外殿の倚子の用途について

改めて確認しておくと先行研究では、御帳のある内殿を夜の空間（寝所）、倚子のある外殿を昼の空間（昼の御座所）とみなしていた。つまり、八幡造の社殿では1柱の神に対して2箇所の神座があり、そのうち一方は倚子によって構成される神座であると考えていた。しかし、少なくとも中世の石清水八幡宮に関しては、その見解には疑問がある。前項でみたように、外殿には畳・茵・几帳・屏風などから構成される神座が確認でき、倚子は、この神座とは別の位置に露出して置かれている。少なくとも前述の外殿の神座の一部とはなっていない。これは先学が参考にしていた清涼殿の昼御座における倚子の安置の仕方と異なる。清涼殿の昼御座は御帳台（几帳に相当）の内部の畳の上に倚子が安置されているのである。ここから、倚子が清涼殿の昼御座の倚子と同様な用途をもっていると判断するはためらわれる。

ここでもう一度『神宝御道具惣目録』を参照にしたい。「外殿御座具足」の項目に以下のような記述がある（<>内は割註、／はその改行をしめす）。

胡床三脚 <在茵三枚、錦縁、放生會／御行之時、外殿御座斬也>

「胡床」とは椅子のような座席のこと、つまり倚子のことである。この記述から放生会ほうじょうえ（旧暦8月15日に神体が鳳輦ほうれんという神輿のよなものに移されて、本殿が建つ山のふもとにある頓宮に出御する祭儀で、石清水八幡宮では非常に重要視されたもの）で神が出御する際の、外殿における御座であることがわかる。すなわち、倚子は極めて限定された状況において神座となるのであって常設の神座ではないのである。そして放生会という特殊な祭儀との関係の方が強いのであって、清涼殿における昼御座の倚子のような、昼の空間とかかわりを想起させるものではない。

外殿の性格はある時期を境に変化しているのではないか？

『諸縁起』所載の指図には以下のような記述がある。また、この記述とほぼ同文の内容が『八幡宮寺内外殿之間事』でも確認できる。

外殿御座、自公家非調進、内殿御座被調進之時、以其旧御座敷之也、元奉居蕨形御輿、

敦實親王御造立御正躰被鎮坐輿内歟、而保延炎上之後、件御輿無之由、所司等申

つまり、外殿の神座はかつての内殿の神座を移したものであるという。保延年間の炎上以前は外殿においては「蕨形御輿」を据え、その内部に敦實親王（893-967）が造立した御正躰を安置していたという。しかし保延年間に炎上し、この御輿は失われてしまった。

この敦實親王造立の御正躰は鎌倉時代後期の歴史書『百鍊抄』などでもその存在が確認でき、保延6年（1140）の本殿の火災で罹災し、改造するか否かが議論されている。また別の史料『八幡宮寺縁事抄』によると、その御正躰は延喜14年（914）に造立されたことが知られる。また、鎌倉時代の説話集『古事談』によると御正躰は僧形の神像であった。石清水八幡宮本殿は貞觀2年（860）に創建されて以来、保延6年まで火災が発生していないことから、この御輿は延喜14年の造立の御正躰を奉安するために製作され、保延6年の炎上までは外殿に安置されていたとみて大過ないだろう。なお、延喜14年以前に外殿には何があったかは不明である。少なくとも、敦實親王の御正躰以前に神体の存在は確認できない。

御輿のような神々の乗り物を本殿内部に納めていた理由は不明であるが、先述のように石清水八幡宮

は旧暦8月15日に神体が鳳輦（ほうれん 神輿のようなもの）に移されて、本殿が建つ山のふもとにある頓宮に出御する放生会という祭儀がある。もしかしたらこの祭儀と何らかの関係があるのかもしれない。とはいって、この御輿は、几帳や屏風・畳などから構成される通常の神座の室礼とは大きく隔たっており、単なる神座と解釈することは憚られる。

小結

以上の検討から、外殿には倚子のほかに几帳で覆われた神座があり、倚子はその外部に置かれる。この置かれ方は清涼殿における倚子の安置方法とは異なるだけでなく、放生会という特定の祭儀と結びつく可能性が高いものである。よって、昼の空間を象徴する調度と解釈するのは難しいのではないだろうか。また、この几帳で覆われた外殿内部の神座は、保延6年以降に新設されたもので、それ以前は神体を安置した御輿が置かれていた。この御輿は通常の神座とは考えにくく、保延6年以前の外殿は単なる神殿とは異なる性質を帶びていた可能性がある。

4. おわりに

石清水八幡宮本殿の室礼を検討してみた。その結論は以下のとおりである。

- ・倚子の置かれ方は清涼殿の御座とは異なっているだけでなく、放生会という特定の祭儀との結びつきが強い、特殊な神座である可能性が高い。よって清涼殿や貴族住宅からの連想から、外殿が昼の御座所と判断できるかは疑問である。
- ・外殿内部の神座は、保延6年以降に新設されたものである。それ以前は後世ではみられない御輿が置かれており、単なる神座とは考えにくい。これは、外殿の空間の性質や使用法が保延6年を境に変化していることを暗示する。

以上から、外殿は昼の空間、清涼殿でいう昼御座に相当する建物とみるとこれまでの研究による定説は成立しがたい。さらに、保延6年以前は単なる神の座ではない特別な機能を持っていた可能性がある。これは八幡造の理解に再検討をせまるものである。保延6年以前を含めた外殿の性格や、倚子の用途、八幡造の発生要因については今後の課題としたい。

主要参考文献

- 石清水八幡宮編 2014『石清水八幡宮本社調査報告書 御鎮座一一五〇記念 德川家光公本社造営三八〇年』
京都府教育庁文化財保護課編 1969『重要文化財 石清水八幡宮社殿修理工事報告書』京都府教育委員会
井上充夫 1959「拝殿の起源について」『日本建築学会論文報告集』,62,pp.135-142
稻垣栄三 1968「本殿形式の起源」『原色日本の美術 16 神社と靈廟』 pp.174-203
土田充義 1973「八幡宇佐宮本殿について」『日本建築学会論文報告集』,204, pp.83-90,95
太田静六 1979「八幡造の源流と從來說への疑問 八幡造の祖形と源流と変遷 その4」『日本建築学会論文報告集』,283,pp.142-149
林一馬 1980「八幡造の形成過程について（下）」『日本建築学会論文報告集』,292, pp.142-151
高橋啓三編 1973『石清水八幡宮史料叢書 四 年中行事 服忌社參』石清水八幡宮社務所
高橋啓三編 1975『石清水八幡宮史料叢書 五 造営 遷宮 回祿』石清水八幡宮社務所

図版出典

図1：京都府教育府文化財保護課編 1969『重要文化財 石清水八幡宮社殿修理工事報告書』京都府教育委員会に加筆修正。図2：図1前掲書所載図面に修正・転載。図3：高橋啓三編 1976『石清水八幡宮史料叢書 二 年中行事 縁起・託宣・告文』石清水八幡宮社務所 所載写真を修整・転載。図4：高橋啓三編 1975『石清水八幡宮史料叢書 五 造営遷宮 回禄』石清水八幡宮社務所。図5・8：石清水八幡宮提供写真。図6・7：筆者作成。図9：図4前掲書所載写真に加筆修正。

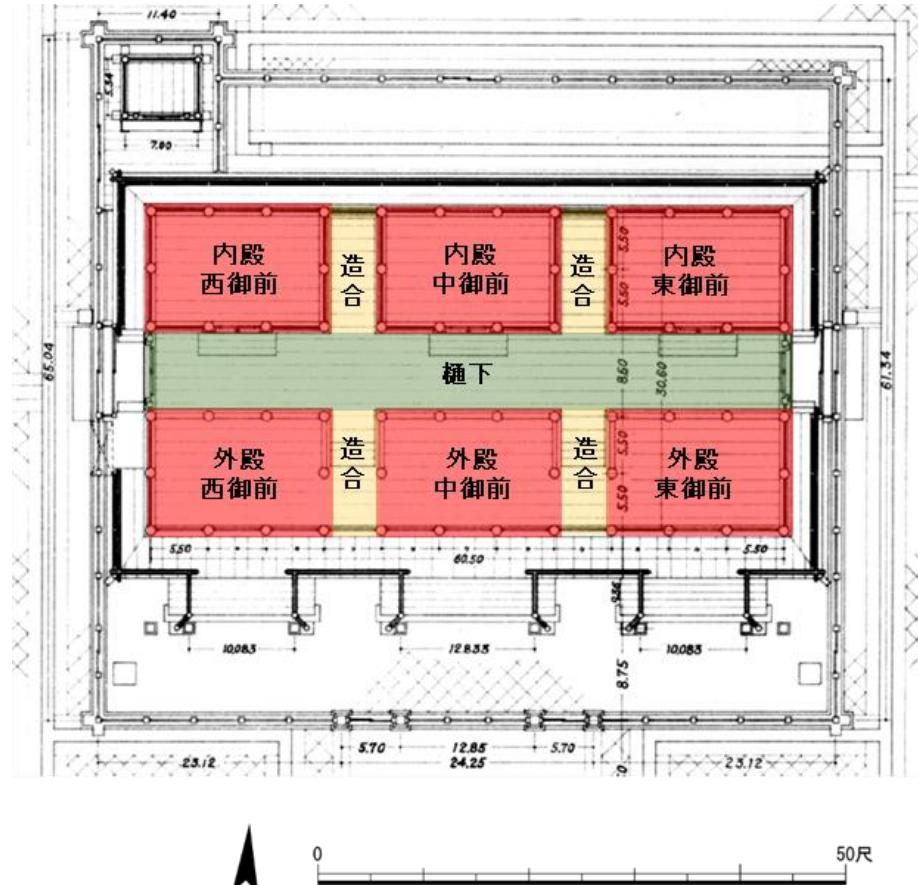


図1：石清水八幡宮本殿平面概念図

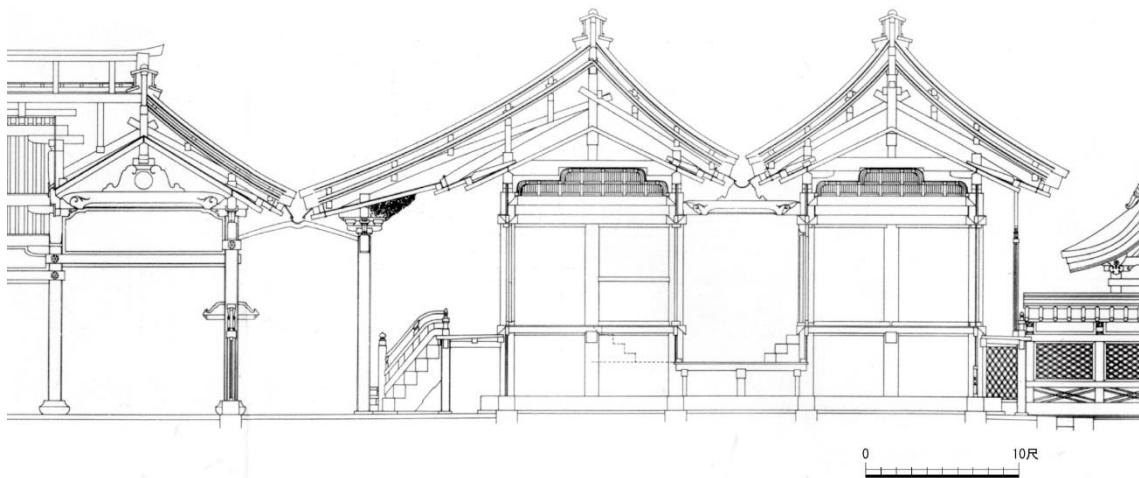


図2：石清水八幡宮本殿断面図

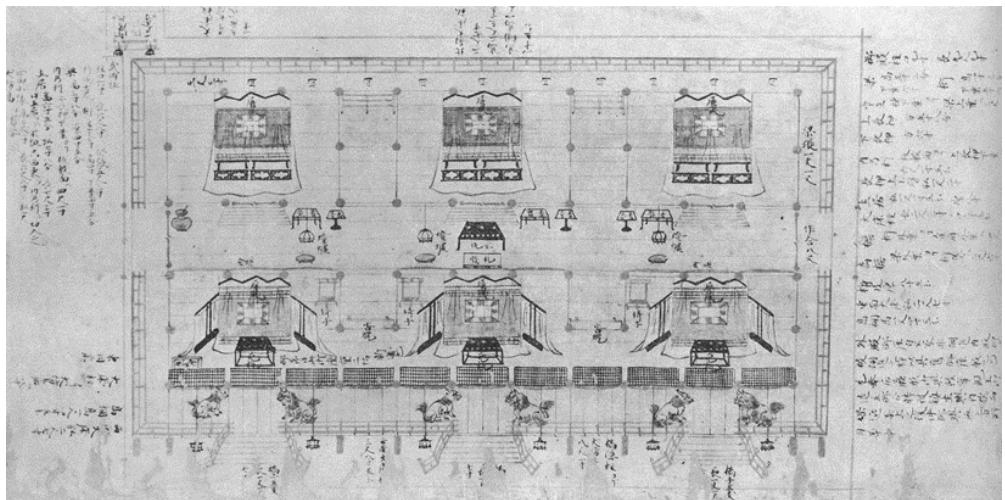


図3：『諸縁起』所収の指図



図4：『石清水八幡宮御指図』(一部)

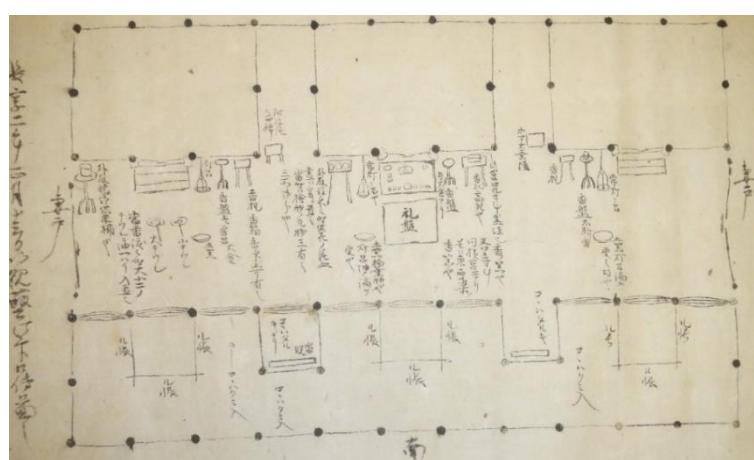


図5：『八幡宮寺内外殿之間事』(一部)